

---

# 錦繡事変（きんしゅうじへん）

猫目石

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

きんしゅうじん  
錦繡事変

### 【Nコード】

N9880X

### 【作者名】

猫目石

### 【あらすじ】

りんが大雨の中、行方知れずになって三年。

西国では大掛かりな紅葉狩りが催されることになった。国主の殺生丸以下、主だった重臣がすべて揃う秋の宴。さて、何が起きるか？

11部の連載です。

？

朱色、鴉色、蜜柑色、深緋、雌黄、木賊色、芝翫茶、松葉、縹色、山吹、海松茶、鶉色、臙脂、この紅葉の見事さをどう表現すればいいのだろうか。

『筆舌に尽しがたい』とは、当にこの事を言うのだろう。

次から次へと色の名を挙げてみるが、きりが無い。

ああ、もう、よそう。

ともかく、赤から黄、茶色から緑と、あらゆる色彩が見事な諧調を保って全山を覆い尽しているのだ。

当に錦秋の名に恥じぬ場景が広がっている。

ここは西国でも紅葉の名所として名高い錦繡山脈の中に位置する小さな盆地。

周囲をグルリと紅葉に彩られた山々に囲まれたすり鉢状の大地である。

敷地に換算すれば三千坪ほどになるだろうか。

盆地のそこかしこに自生する優に千年の樹齢を数えるに違いない銀杏や楓の大木。

その周囲に沿って、これまた様々な色の毛氈が敷き詰められている。

赤、青、緑、黄、紫、茶、白、黒と頭上の紅葉と競うように鮮やかな色彩が乱舞している。

それは、まるで島のように各家の陣地を主張している。

当然、目ばしい大木は有力な家々が独占している。

中でも、一際、見事な大紅葉の大樹の根元には血のように赤い猩々緋の毛氈が敷き詰められていた。

先代の西国王、殺生丸の父、鬨牙王の母方の従兄弟に当たる豺牙<sup>さいが</sup>一門の物である。

緋毛氈の上座に当たる位置には、漆黒<sup>しっこく</sup>の絹地に金糸、銀糸の刺繡<sup>ししゅう</sup>で飾られた対<sup>ついで</sup>の座布団と脇息<sup>きょうそく</sup>が置かれ主賓の着座を今や遅しと待ち構えている。

「宴<sup>うたげ</sup>の準備は万端<sup>ばんたん</sup>、怠りないであろうな」

「ハッ、豺牙<sup>さいが</sup>様に命じられた通りに全て整っております」

小山のような体躯に縮れた赤毛の男、豺牙<sup>さいが</sup>は家臣の言葉にニヤリと笑った。

太い眉、丸い大きな目、突き出た鷲鼻、大きな分厚い唇、気の弱い者なら怯えて泣き出しそうな魁偉<sup>かいい</sup>な容貌である。

「お父さま、殺生丸さまは本当にお越しになるのでございましょうね」

赤い髪の美女が豺牙に問いかける。

豺牙<sup>さいが</sup>ご自慢<sup>まなむすめ</sup>の愛娘、由羅である。

幼い頃に亡くなった美人の母親似なのだろう。

由羅は髪の色こそ父親と同じ赤毛だが中々の美姫である。

純白の白絹に秋の草花を散りばめた豪華な打ち掛けを身に纏<sup>まと</sup>う由羅は見ようによつては花嫁のように見える。

豺牙が普段の銅鑼声からは及びもつかない潜めた声で由羅に注意を

促す。

「間違いない。よいか、由羅。そなたの魅力で、必ずや、あ奴を骨なしにするのだぞ」

「うふふつ、お任せ下さい、お父さま。必ずや殺生丸さまを私の虜とりこにしてみせますわ」

己の容貌に相当な自信があるのだろう。

由羅は紅い唇をほころばせ高慢な言葉を返す。

外見こそ余り似ていないものの、そこはやはり親子、由羅の内面も父親の豺牙と大して変わりが無い。

つまり、どこまでも権力と財力を追い求める欲望の権化なのである。

遠い空にポツリと小さな点が映うつった。

それは良く見ると一列に連なった行列でユックリと盆地に近付いてくる。

列の先頭を走るのは希少な双頭の竜、阿吽またがに跨った西国王、殺生丸。右肩に流れる華麗な白銀の毛皮には従者の小妖怪、邪見がしがみ付いている。

その後、重臣の尾洲と万丈、側近の木賊とくさと藍生あいおい、殺生丸の乳母であった女官長の相模、以下、続々と家臣が続いている。

「おいでになったようだ。皆の者、そそうのないようお持て成したせ」

「ハッ！」「」「」「」「」「」

野太い声の主の命令に家臣一同が声を合わせて答える。

同時に豺牙は腹心の部下に目をやり声なき合図を交わしていた。

（手筈は良いな？）

（仰せのままに）

これまで豺牙は殺生丸と由羅を結びつけるべく様々な策を巡らしてきた。

当代の西国王、殺生丸には先祖の呪のせいもあつて親類縁者が非常に少ない。

だからこそ、殺生丸の父の従兄弟という本来ならば遠縁でしかない豺牙が、当主が不在の間、縁戚として権勢を揮うことが出来た。

だが、本来の主、殺生丸が帰還した今、以前のように西国王の縁戚として好き勝手に税を徴収したり領地を強奪する真似は出来なくなつた。

それどころか、旧悪を暴かれる怖れさえある。

このまま手を拱こまぬいていては縁戚としての立場さえ危うい。

そう考えた豺牙は、より強力な立場を手に入れるべく、即、行動を開始した。

西国王の舅こいせきという外戚として、これ以上ない強力な立場を手に入れる為に、豺牙はあらゆる機会を通して自分の娘の由羅を売り込んだ。殺生丸と由羅が婚姻を結んだ後は男子を産んでくれれば万々歳。

そうなれば男孫を後継者として擁立ようりつし、その後見としてジワジワと

立場を強め西国の実権を握る。

だが、そうした豺牙の計画を阻害する存在が浮き彫りになった。三年間、殺生丸が欠かさず三日おきに通う人里に住まう人間の小娘。邪魔な芽は摘まねばならない。

周到なる準備の下、豺牙は部下に命じて人間の小娘を始末させた。まず大水を降らせる為に雨師と風伯に頼み込み大水を降らせた。その上で毒蛾の蛾々が幻惑の術で増水した川の近くに小娘を誘き寄せ川に落とし込んだのだ。

状況から見て誰もが溺死したと思っただろう。もう今から三年も前のことだ。

豺牙は、この宴が事実上の婚礼と周囲の者に認識されるよう画策してきた。

真紅の毛氈、対の座布団、脇息、御膳立ては全て調った。

後は主役の殺生丸と由羅が揃いさえすれば良い。

殺生丸に饗する酒には予め強力な媚薬を仕込ませてある。

国主の殺生丸を始めとして犬妖族は尋常ならざる嗅覚を有している。人間なら、到底、気付くはずもない微かな異臭でさえ彼らは感知する。

それをごまかす為に屠蘇散を大量に入れ『薬酒』と銘打って用意させた。

更に酒肴には精力を増強させる山海の珍味佳肴を取り揃えてある。要は主賓の場に殺生丸が就いてくれさえすれば、ほぼ豺牙の企ては成就するのだ。

後は済し崩しに婚姻を成立させてしまえば良い。

己が目論みの成功を確信した豺牙は込みあげてくる笑いを押し殺すのに苦勞していた。

『きんしゆへん錦繡事変？』に続く



？

りんが生きていると殺生丸が知ってから、かれこれ一年が経とうと  
している。

あの方士、方斎の占いでは、りんは間もなく戻ってくると聞いた。  
それ以来、殺生丸は暇を見つけては人界へ渡り、りんを捜し歩いた。  
だが、僅かな手がかりさえ見つからず現在に至る。

本当に、あ奴の易占は当たるのだろうか？

日毎に殺生丸は苛立ちを募らせていた。

(りん、りん、何処にいる！？)

今日とて人界へりんを捜しに行きたいのに、くだらぬ催しに顔を出  
さねばならぬ。

紅葉の宴だと！？

ハッ、何でも豺牙めが強硬に主張したらしい。

豺牙・・・今は亡き父上の母方の従兄弟。

本来なら縁戚とも言えぬような遠縁。

にも拘らず私が西国を留守にしていた間、あ奴は血筋を盾に要職に  
就き、散々、甘い汁を吸ってきたらしい。

典型的な虎の威を借る狐だ。

大して能力もない癖に権力欲だけは強い輩などに用はない。

少し奴の身边を調べただけで唾棄するような不正行為がゴロゴロ出  
てきた。

悪行の証拠を突き付け一日も早く罷免してくれるわ。

罪状が目之余るようなら死罪もありうる。

そんな物騒な思いを抱きながら殺生丸は阿吽から降りた。  
すると、こちらの到着を待ち構えていたのだろう。

豺牙がゾロゾロと一門を引き連れてやって来た。

一応、奴が一番近い親戚筋になるからな。

見るともなく目をやれば満面の笑顔が気色悪い。

テラテラと赤い顔は恐らく酒浸りのせいであろう。さけびた

『相変わらず、いけ好かない奴だ』と殺生丸は感じた。

心の中では、こちらを青二才と嘲りながら表面上は甘言を弄して従  
う素振りを見せる男。

殺生丸は豺牙の顔を半眼で眺めつつ、益々、内心の決意を固めた。

「ようこそ、おいで下されました、殺生丸殿。ささつ、どうぞこち  
らへ」

やけに上機嫌な豺牙が挨拶もそこそこに主賓の座に殺生丸を着かせ  
ようと先に立って歩き始める。

用意された宴席を見れば猩々ししやう緋ひの毛氈きまつに設けられた豪華な対ついの座布  
団きふだんと脇息ししき。

その設えを見た殺生丸は勿論、従者の邪見、重臣の尾洲、万丈、側  
近とくみの木賊、藍生、女官長の相模が一樣いちように顔を顰しかめた。

瞬時に豺牙の狙いを読み取ったのだ。

本来ならば主賓は殺生丸のみ、座布団は一客で良いはず。  
それなのに、何故、座布団が対<sup>つ</sup>なのか？

一方の座布団に殺生丸様が座るとして、もう片方には誰が？  
見ている限り、豺牙が横に座る気は毛頭<sup>もうとう</sup>ないらしい。

尾洲や万丈は重臣ではあるが家臣の為、殺生丸の横に座る訳にはい  
かない。

側近<sup>とく</sup>の木賊や藍生、女官長の相模にしても同様である。

となると、この場において殺生丸の隣りに座ることが許される身分  
の者は唯一名。

豺牙の娘、由羅のみである。

不味<sup>まず</sup>い！

この状況は非常に不味<sup>まず</sup>い！

これが単なる茶を飲む程度のことならば問題はない。

しかし、この場合は酒食を供する宴席。

然<sup>しか</sup>も、由羅の装いは純白の絹地に秋の草花を散らした美々しい打ち  
掛け。

見ようによつては、まるで花嫁のように見える衣裳。

いや、気のせいではない。

明らかに、そう見えるよう意識して装ったに違いない。

『謀<sup>はか</sup>られた！』

殺生丸を始め一行の誰もが豺牙の意図する処に気付いた。

豺牙に誘導されるがまま殺生丸が席に付けば相手の思う壺<sup>は</sup>に嵌<sup>は</sup>まっ  
てしまう。

何しろ、この宴には西国の主だった者が集まっている。

このままでは紅葉の宴が婚礼のお披露目の宴と勘違いされてしまう  
怖れが多分にある。

殺生丸は西国に帰還して以来、これまで一度も公式の催しに出席したことがない。

謂わば、この紅葉の宴が初の『お目見え』となる。

事前にそうと知ったせいだろう。

今回の宴に参加する家の数が鰻登りに跳ね上がった。

そうと知った上での豺牙の強行だった。

豺牙は高を括っていた。

礼儀から云っても殺生丸が着座を拒否するはずがないと。

それに男なら美しい娘が同席するのを喜びこそすれ否みはすまいと勝手な思い込みをして。

周囲がやきもきする中、豺牙の娘、由羅はウツトリと殺生丸に見惚れていた。

双頭の竜に乗って空から降り立った西国王は噂に違わず美しかった。白銀の髪は陽を弾いて煌き秀麗な容貌は寸分の狂いもなく刻まれた彫像のように端整で夢のように麗しい。

三年前に帰還して以来、殺生丸は西国内では武家の棟梁に相応しい直垂を着用するようになっていた。

以前の振袖と指貫に妖鎧を装備したお馴染みの戦装束は専ら人界へ赴く時のみとなっている。

今、殺生丸がお召しになっているのは青味を帯びた銀の共布で仕立てられた直垂。

光沢のある絹地に織り出された見事な柄行は優美に空を舞う鷺の姿。腰に差すのは二本の大刀、朱塗りの鞘の天生牙と白木の鞘に雷紋を彫り込んだ爆碎牙。

優雅にして華麗、尚且つ凜々（りり）しい貴公子ぶりに男女に限らず誰もが目を奪われた。

由羅とて例外ではない。

初めて見た殺生丸に一目で心惹かれた。

（何としても、あの若く美しい御方の妃になりたい）

由羅の心にムクムクと願望が湧き上がる。

殺生丸を己の容色で籠絡しようと宴に乗り込んできた由羅は逆に西国王の美貌に魅せられ、あからさまに秋波を送っていた。

このまま、父、豺牙の狙い通りに事が進めば由羅の望みが現実となる可能性は高い。

妖界でも最大領土を誇る大国、西国の王、その妃ともなれば誰もが傳き、どんな贅沢も我が儘も思いのままである。

それは、まさしく由羅が思い描いてきた栄耀栄華に満ち溢れた未来そのものと言っている。

殺生丸の傍らに妃として寄り添う己の姿を想像して由羅は独り悦に入っていた。

由羅が白昼夢に浸っている最中、周囲がザワザワと騒ぎ出した。見れば、皆、空を仰ぎ見ている。

不思議に思っ て視線を空にやれば、静々（しずしず）とこちらに近付いてくる一群が目に入った。

遠目にも一群が煌びやかな女性の集団とハッキリ判る。

中央の牛車を守るように十数名の女房衆が周囲に控えている。

それは、今回、誰もが出席するとは予想もなかった西国一の貴婦人、前西国王妃にして当代西国王、殺生丸の御生母さま、狗姫いぬぎの御方の御一行だった。

【直垂ひたたれ】：「犬夜叉」コミックス13巻に登場する若殿、人見蔭刀ひとみかげわき殿（＝奈落）の城内での衣裳を参考にして下さい。

『錦繡事変きんしゅうじへん?』に続く

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9880x/>

---

錦繡事変（きんしゅうじへん）

2011年10月29日14時19分発行